



国際通貨研究所メールマガジン（第 25 号 2014/4/10 発行）



Institute for International Monetary Affairs (IIMA)



<http://www.iima.or.jp/>



※本メールは配信専用のアドレスからお送りしております。

返信をいただいても当方では受け取ることができません。

閲覧には Adobe Reader が必要です。

Adobe Reader のダウンロードはこちらから→ <http://get.adobe.com/jp/reader/>



3 月 19 日に開催致しました第 23 回国際金融シンポジウムの各パネリストのスピーチ資料を IIMA のホームページに掲載しました。

→ http://www.iima.or.jp/info_active/symposium/index20140319.html



1. 理事長 行天豊雄のコラム 『改革とチャイニーズ・ドリーム』

中国経済についての昨今の海外の論調は景気減速、シャドウバンク、金融破綻等余りか
んばしくないものが多い。しかし現地へ行ってみると、むしろ強く感ずるのは改革ムー
ードである。昨年 11 月の三中全会後に発表され…

（株式会社マネーパートナーズへの寄稿）

（全文はこちらから）

<http://www.iima.or.jp/Docs/merumaga/2014/20140410gyoten.pdf>

=====

2. 龍谷大学 経済学部 教授 IIMA 上席客員研究員

村瀬哲司のコラム 『アフリカの女王』

最近ある出来事をきっかけに、記憶によみがえった映画がある。1951 年の米英合作の

「アフリカの女王」である。あらすじは次の通りだ。

第一次大戦中、ドイツ領の東アフリカで、女性…

(IIMA メールマガジンへの寄稿)

(全文はこちらから)

<http://www.iima.or.jp/Docs/merumaga/2014/20140410murase.pdf>

■ 購買力平価グラフの更新

<http://www.iima.or.jp/research/ppp/index.html>

■ 今月の新着レポート

1. 「蓄積した歪みの是正を迫られるアルゼンチン」

今世紀初頭の経済危機脱却から続く政策運営の結果、アルゼンチンは、高インフレが定着し、アルゼンチンペソの急落を招くとともに、外貨準備の減少ならびに再デフォルト危機に直面している。大統領 2 期目の半ばを過ぎたフェルナンデス政権は、これまでの政策運営を通じて、生じ、蓄積したこれらの歪みの是正を迫られている。悪化しているアルゼンチンのリスク状況は、歪みを是正する過程において、短期的には一段と悪化する局面も否定できない。しかし、アルゼンチンはこれまでの独自路線から国際協調路線へと転換を図り始めており、歪みの是正に取り組み始めている。国際社会の協力を仰ぎながら、投資環境を改善していくことにより、中期的にリスク状況が改善される可能性は少なくない。

http://www.iima.or.jp/Docs/newsletter/2014/NL2014No_16_j.pdf

2. 「認知度の向上が求められる ASEAN 経済共同体」

ASEAN 経済共同体 (AEC) 創設の期限まで残り 2 年を切ったが、進捗は緩慢で、期限内の統合達成が危ぶまれている。進捗が遅い理由の一つに、ASEAN の企業が AEC に関心がないことがあげられているが、アジア開銀によるアンケート調査結果は AEC に対する認知度が低いことを示しており、これを裏付ける内容となっている。今後、ASEAN が AEC に対する認知度を引き上げ、経済統合を進めるためには、各国政府による企業への関連情報提供や、支援体制の拡充が重要である。

http://www.iima.or.jp/Docs/topics/2014/253_j.pdf

3. 「Simple Measurement of Macroeconomic Imbalances and Currency depreciation in Emerging Countries」

「マクロ不均衡の簡易測定法と新興国通貨安」の英語版

http://www.iima.or.jp/Docs/newsletter/2014/NL2014No_15_e.pdf

4. 「流動性規制と金融政策」

グローバル金融危機の反省から、国際的に活動する銀行に対して初めて定量的な流動性規制が課されることになった。流動性規制は、良質な流動性資産に対する需要や銀行行動の変化などを通して金融政策に影響を及ぼす可能性があり、極端な場合、金融調節の枠組み変更を迫られることも想定される。現時点で導入の影響は不明な部分が多く、各国当局による十分な監視と、問題が生じた場合の柔軟な対応が求められる。

http://www.iima.or.jp/Docs/newsletter/2014/NL2014No_14_j.pdf

5. 「モロッコ経済の現状と今後の見通し」

モロッコは近年、経済自由化、海外からの投資誘致や各種インフラの整備により、成長軌道に乗っている。2011年以降「アラブの春」の中でも早期に混乱を收拾し影響を最小限にとどめたことで政治・社会の安定に対する評価も高まった。一方、農業部門がGDPの大きなウェイトを占め、エネルギーを輸入に依存することから経済的基盤は脆弱と言わざるをえない。旧宗主国フランスをはじめ欧州との経済的な一体化強化の取り組みは長期的観点からはプラスに捉えるべきだろう。IMFは2018年までの今後5年間で平均5%弱と、北アフリカで最も高い成長率を見込む。

http://www.iima.or.jp/Docs/newsletter/2014/NL2014No_13_j.pdf

6. 「Integration of the ASEAN Banking Sector」

「ASEANの銀行セクター統合について」の英語版

http://www.iima.or.jp/Docs/newsletter/2014/NL2014No_1_e.pdf

7. 「新たな段階に入る人民元為替相場制度改革」

近時、緩やかに人民元高方向に進む基調にあった人民元相場が、全人代を控えた2月後半に急激に人民元安の方向に動いた。背景には中国人民銀行がドル買い人民元売り介入を行ったとの観測がなされている。今回の介入は、単純な自国通貨安誘導と言うよりも、投機は

筋に対して意図してストレステストを行ったと見ることができそうだ。そして、その裏に変動幅拡大に向けた地ならしの意図があったと思われる。人民元相場についての見方が分かる時こそ変動幅拡大の絶好のチャンスと言える。

http://www.iima.or.jp/Docs/topics/2014/252_j.pdf

8. 「マクロ不均衡の簡易測定法と新興国通貨安」

経常収支、財政収支（いずれも GDP 比）とインフレ率（マイナス表示）を合算した「不均衡指標」と主要新興国通貨の昨年 5 月以来の対ドルレート変化率の相関を調べたところ、高い相関があった。為替市場が、マクロ不均衡の大きさに着目していることが分かる。チリ、インドネシアは売られ過ぎで、逆に韓国ウォンは過大評価となっている可能性がある。

http://www.iima.or.jp/Docs/topics/2014/251_j.pdf

■ 今週のキーワード

- ★ 準備預金
- ★ 先進的地位
- ★ 日中取引変動幅

レポートに関連する専門用語の参照はこちらから

<http://www.iima.or.jp/Docs/keyword/keyword.pdf>

■ 今月の IIMA

26 年度が始まりました。IIMA では、今年度も国際金融に関する様々なテーマについて調査分析を進め、レポート発信、講演、シンポジウムなどの形で情報発信をしていく所存です。とりわけ、米国の Tapering 進展による世界金融市場への影響や、日米の産業構造変化を背景とする経常収支・為替相場への影響という中長期の議論を重要テーマに設定して臨んでまいりたいと考えております。皆さまのご指導をよろしくお願いいたします。

先月 19 日に開催しました国際金融シンポジウム「真の夜明けに向けて～世界経済の成長のための政策と課題～」には、多数の方にお集まりいただきありがとうございました。例年を大きく上回る参加申込があり、おかげさまをもちまして盛会のうちに終了いたしました。内容の詳細は後日、IIMA のホームページにオナーショナルペーパーとして掲載

いたしますので、どうぞご期待ください。

【バックナンバー】

<http://www.iima.or.jp/mailmagazine.html>

【次号】

2014年5月12日配信予定

【メールマガジンの配信停止・配信先変更】

<https://m.entryform.jp/m/iima/>

【各種お問い合わせ】

admin@iima.or.jp

◇発行◇*****

公益財団法人 国際通貨研究所

〒103-0021 東京都中央区日本橋本石町 1-3-2 三菱東京 UFJ 銀行日本橋別館 12 階

[HP] <http://www.iima.or.jp>

***** Copyright (C) IIMA All Rights Reserved. *****